

萬延元年(一八六〇年) 春、風邪流行(武江年表)  
慶應三年(一八六七年) 六月初旬、冷氣催シ、諸人殆々若ク、風邪、熱病行ハル(武江年表)

流行性感胃ハ、傳播迅速ニシテ、流行區域ノ廣汎ナルコト、他ノ傳染病ノ及フトコロニアラス、時トシテハ一地方ニ限ルコトナキニアラスト雖モ、多クハ大流行的ニ、各國一齊ニ發起スルヲ常トスルカ故ニココニ西洋ニ於ケル流行性感胃ノ流行ト、我國ニ於ケル咳病又ハ風邪、傷風等ノ流行ノ年次トヲ比較スルコトハ疫學史上有益ノコトナルヘシ

這箇世界流行ノ跡ヲ探スルトキ、獨リ疫學上有益ナル概念ヲ得ルニ止マラス亦人類生活ノ過程ニ於ケル一現象トシテ興味少ナカラサルモノアルヲ覺ユ(前章)既往ニ於ケル海外諸國ノ流行(參照)

明治二十三年ノ大流行ニ關シテハ詳細ナル統計ヲ得サルヲ以テ當時ノ醫事新報並ニ官報ノ記事ヲ示スコトトセリ

明治二十三年六月二十五日中外醫事新報ニ掲載セラレタル記事左ノ如シ

一八八九年(明治二十二年)ノ末露西亞ニ發生セシ流行性感胃ハ忽ニシテ歐洲全土ヲ蹂躪シ遂ニ大西洋ヲ航シテ米國ニ波及シ尙ホ本邦ニモ本年四月來著シク流行シ各種ノ學校ハ患者夥クシテ其校ヲ閉ルノ仕合トナリ、健康上ハ勿論、教育上ニモ多少ノ損害ヲ與ヘタルハ掩フヘカラサルナリ。又本病流行ノ區域ハ如何ニシテ患者ノ數ハ幾許ナルヤト云フニ東京醫會々長三宅秀氏ハ本病ノ届出ヲ各支部ニ望ムト雖モ其届漏ノ數ハ幾十倍幾百倍ナルヤ知ルヘカラス、如何トナレハ彼ノ必ス届出ツヘキ六種傳染病サヘ届漏アルニ届出ヘキ規則ナキ流行性感胃ニ届漏許多アルヘキハ自然ノ原則ナレハナリ、我東京及全國ノ患者數ハ如何、前陳ノ理由アルカ故ニ之ヲ確知スルハ到底能ハサル事ニシテ住民ノ約一〇%本病ノ侵襲ヲ免カレサルモノトスレハ患者ノ數東京ハ十五萬人、餘ハ四百萬人ナルヘシ。明治二十三年五月二十九日ノ調査ニ依ル初發當

日迄ノ陸軍諸兵流行性感胃患者數ハ左ノ如シ

東京	一、八〇三
地方	一、七四一
合計	三、五四四

右ノ調査ニ據レハ東京隊ノ諸兵員一日平均數(四月、官報二〇七九號)一〇八四七・五八ニ比スレハ百人ニ付患者一六六ニノ割合ニシテ各地方ハ一〇六ニナルカ故ニ之ヲ平均スレハ一二・三一二ナルナリ前ニモ云ヘル如ク市民ノ罹病數ヲ一〇%ト推算スレハ府下ノ患者概數ハ左ノ如シ

東京市	一〇八、一二〇
郡部	二一、三三〇
合計	一二九、四五〇

右ノ豫算ニ據レハ府下市郡ノ患者概數ハ十萬人ニシテ全部部ハ二萬人、合計十二萬人ナリトス

二三主要府縣ノ流行狀況ニ付官報ニ掲載セラレタル記事左ノ如シ

流行性感胃患者(東京府)本年二月以降府下ニ流行性感胃流行ノ兆アルニ由リ東京醫會本部ヲシテ其ノ會員ニ於テ診察シタル該病患者數ヲ報告スルノ手續ヲ爲サシメ六月十五日マテニ醫會各支部ヨリ本部ニ報道シ同本部ヨリ當府廳ニ報告シタル患者數ハ總計二萬六百七十七人ニシテ其ノ發生地部區別ハ左ノ如シ(東京府)

但シ此患者數ハ神田區、日本橋區、京橋區、芝區、麻布區、赤坂區、小石川區、本郷區、下谷區、淺草區、本所區、深川區、十二支部ノ報告ニ依ル者ニシテ麹町區、四谷區、牛込區、荏原郡、東多摩郡、南豐島郡、北

豊島郡南足立郡南葛飾郡ノ八支部ハ未タ報告ヲ致ササルヲ以テ其ノ會員ニ於テ診察シタル患者數ヲ知ルニ由ナク又上記十二支部ト雖モ各會員中未タ報告ヲ出ササル者ナキヲ保シ難キノミナラス該病ニ罹ルモ尙ホ診察ヲ乞ハサル者夥多アルヘキヲ以テ實際ノ患者數ハ蓋シ之ニ數倍スルナラン

越 町 區	一、二〇七人	麻 布 區	六六九人
神 田 區	七二〇人	赤 坂 區	一、一二六人
日 本 橋 區	二、〇四二人	四 谷 區	四八八
京 橋 區	五四五人	牛 込 區	二九四人
芝 區	三、九七二人	小 石 川 區	三四四人
本 郷 區	六〇六人	南 豊 島 郡	二〇二人
下 谷 區	一、三三三人	北 豊 島 郡	一二七人
淺 草 區	二、〇二七人	南 葛 飾 郡	一七三人
本 所 區	二、三三四人	發 生 地 不 詳	九七九人
深 川 區	一、八六四人	總 計	二〇、六七七人
南 足 立 郡	二人		
荏 原 郡	二三人		

(明治二十三年七月三日官報)

兵庫縣下ニ於ケル流行性感冒ノ概況ヲ調査スルニ該症ノ同縣下ヘ侵入セシハ本年三月中旬頃ニシテ神戸市内ニ初マリ漸次數郡内ニ發生流行ノ徵ヲアラハスニ至レリ初發以來本月二日

マテニ届出ヲタル同患者ハ神戸市二千九百四十三人其他郡部ヲ合シ計三千八百七人ニ及ヘリ其ノ他該病ニ罹リタルモ醫師ノ治療ヲ受ケサリシヨリ前記ノ數中ニ加ラサル者夥多ナルヘシト云フ (同年七月七日官報)

長野縣ニ於ケル流行性感冒ハ漸次蔓延未タ消滅ノ期ニ至ラス今尙猖獗ノ勢アリト雖モ孰モ輕症ナリ今醫師或ハ賣藥營業者等ニ依リ其ノ患者ノ大略ヲ調査スレハ長野市千四百二十九人上田市三千二百八人松本市二千三百八十四人飯田市千八百五十四人計八千八百七十五人ナリ新潟縣初發ヨリ去月三十日迄ニ各郡醫師ヨリ届出タル總患者ハ三千三百四十人内死亡二人ナリ (同年七月十六日官報)

京都府去月中京都府管内ニ於ケル流行性感冒患者ハ合計二千三百八人ナリ京都市中ハ漸次減少シ目今ハ各郡村ニ波及セリ (同年八月八日官報)

大坂府下ニ於テ本年五月五日ヨリ去月二十四日マテニ届出タル流行性感冒患者總數ハ四千二十五人ニシテ爾後届出ノ患者ナク目下全ク終熄ニ歸セシモノノ如シ (同年八月十六日官報)

## 第三章 海外諸國ニ於ケル今次ノ流行狀況並豫防措置

### 第一節 流行狀況

#### 第一項 流行ノ概況

今回ノインフルエンザパンデミーハ其ノ源ヲ何處ニ發セシヤ全ク不明ニシテ、且ツ其ノ傳播ノ徑路モ不明ニ屬ス。蓋シ流行ノ始マリシ時ハ恰モ世界大戰亂ノ最中ニシテ各國共ニ國境ノ通信ヲ監視シ、惡疫蔓延等ノ不利ナル報道ハ之ヲ明白ニスルヲ避ケタルヘク、又戰亂ノ結果ハ世界各地ノ交通狀態極メテ錯雜シ、其ノ傳播ノ徑路ヲ複雜且ツ迅速ナラシメタルノ觀アリ。若シ大正七年春期ニ於テ世界各地ニ認メラレタル輕微ノ加答兒性氣道疾患カ果シテ「パンデミー」ノ前驅ナリシトセハ、其ノ病毒ノ發生並ニ傳播ハ既ニ久シク隱微ノ間ニ行ハレシモノニシテ、之ヲ追究センコト不可能ナリ。

世ニ「スバニツシユ・インフルエンザ」ノ語アルヲ以テ、今回ノ流行ノ根源ヲ西班牙ニ求メントスル傾ナキニ非サレトモ、「スバニツシユ・インフルエンザ」ナル語ハ既ニ古ク行ハレタルモノニシテ、會々西班牙ニ於ケル「インフルエンザ」ノ慘禍比較的速カニ世間ニ傳ハリシ結果、此ノ古キ名稱ハ再ヒ人口ニ膾炙スルニ至リシニ過キス。西班牙ノ衛生當局ハ、マドリッドニ流行顯ハレサリシ以前既ニ佛國戰線及瑞西ニ「インフルエンザ」流行ノ存在セルコトヲ指摘セリ。一九一八年大正七年秋期及一九一九年大正八年春期ノ大流行後、巴里ニ開カレタル聯合國衛生會議席上ニ於テ各國代表者ノ所説ヲ網羅セル記錄ニヨルモ、今回ノ流行ノ發生地ハ遂ニ不明ナリトセリ。今其

ノ大要ヲ摘ミ本病ニ對スル學界ノ歸趨ヲ示サントス

「聯合國衛生會議ハ一九一九年大正八年三月二十日ヨリ同三十一日ニ至ル間巴里ニ開カル記錄ニ曰ク、本病流行ノ狀態ニ關シテ提出セラレタル諸報告ハ皆一致シ、今回ノ大流行ハ歐洲、亞弗利加、亞米利加、亞細亞、澳洲ノ全世界ニ亘リテ交戰國タルト中立國タルトヲ問ハス、殆ト同時ニ且ツ同一狀況ヲ以テ爆發性ニ現ハレタリ

一九一八年(大正七年)ニ二回ノ流行ヲ見タリ。第一回ハ春季ニ來リ、廣汎ニ瀰蔓シ、比較的良性ニシテ合併症少キヲ特色トス。第二回ノ流行ハ夏ノ末ヨリ秋季ニ亘リ、其ノ傳播蔓延ノ狀勢ハ前回同様ナルモ、病性多クハ重症ニシテ殊ニ肺炎等ノ合併症多ク、又時ニ電擊性ナルアリ、或ハ肺炎敗血症トモ稱ス可キ症候ヲ見タリ

秋期ノ流行ノ特色ハ異常ノ重症ト肺合併症ノ頻發ニシテ此點ハ凡テノ代表者ノ意見一致スル所ナリ

肺合併症ノ顯ハル、ヤ、多クハ先ツ定型的ノ感冒(グリッブ)ニシテ何等豫後ヲ危懼セシメス第三日頃不完全ニ下熱シ、第四、第五日ニ再ヒ體溫上昇シ、肺炎、肋膜炎及ヒ氣管支肺炎等ノ症狀顯ハレ、肋膜及肺ノ化膿ヲ來ス。此種ノ肺合併症ヲ伴フトキハ重症ニシテ死亡率高シ。此經過ハ已往ノ「インフルエンザ」流行ニ際シテモ屢々目撃スル所ナリ

全ク新シキ病型ハ肺炎敗血症ニシテ、嘗テハ黑人ノ異常感受性ト考ヘラレ、專ラセネカル兵ノ間ニノミ見ラレシカ、一九一八年(大正七年)ノ秋期流行ニ於テハ凡テノ人種、凡テノ兵士ニ顯ハレ、疲勞又ハ氣候等ニモ關係ナク、軍人ト一般民或ハ中立國ト交戰國トノ間ニ差異ヲ認メス。此惡性型ハ西班牙ニテ最初認メラレ、次テ葡萄牙、佛蘭西ニ現ハレ、全歐洲、支那、印度、米國、日本ニモ之ヲ

見たり、軍隊ニアリテハ其ノ戦闘力ノ殆ト四分ノ一ヲ失ヒタルモノアリ。此肺炎敗血症ニカ、  
 レルモノハ多クハ健康ナル青年ナリ。此種ノ病型ハ多クハ散發的ニ發生シ、其ノ經過モ特異ニ  
 シテ前驅症ナシニ突然高熱ヲ發シ、患者ハ急激ニ病衰ニ陥リ、急性窒息ヲ來シ、血性咯痰ヲ吐キ、チ  
 ヤノローゼヲ呈シ、心機衰へ、紫斑顯ハレ、數時間乃至三日ニシテ死ス。而シテ胸部聽診上殆ト何等  
 ノ變化ナク、急激ニ死亡セサルトキ漸ク肺炎ノ症候ヲ呈スルヲ常トス  
 電擊性インフルエンザニテハ解剖上肺ニ著明ナル出血性水腫ヲ認ム。輕症ノモノハ氣管支  
 肺炎ノ狀ヲ呈シ、インフルクト或ハ肺炎ノ狀ヲ顯ハシ、顆粒性硬變アリ、或ハ肺組織軟化シテ糊  
 ノ如ク、又ハ變ノ如シ

肺炎敗血症ノ死亡率ハ素ヨリ大ナレトモ未タ特別ノ統計ヲ得ス、他ノインフルエンザ性肺炎  
 ト混シテ計上セラル。米國軍隊ニ於テモ兇惡ナル肺炎ハ發病二十四時間以内ニテ斃ル、モノ  
 アリト報セリ  
 肺炎敗血症ニアリテハ其ノ經過猛烈ナルヲ以テ人ヲシテ肺「ペスト」ヲ顯ハシメタルモ、素ヨリ  
 何等ノ證據アリシニアラス

葡萄牙ノ委員シヨルジハ故國ノ流行ヲ記シテリスボン市ノ墓地稅平日ノ八倍トナリシコト  
 アリト云ヘリ。氏ハ又氣候、戰亂、困窮等モ格別流行ト關係ナキ歴史上ノ事實ヲ擧ケタリ  
 英國海軍ノ報告ニヨレハ、北海及南方ノ勤務ニテ同一病勢ナリシト云フ。英國ニ於テハ海軍  
 ニ「インフルエンザ」流行シ、後一箇月ヲ經テ陸上ノ民間ニ流行ヲ來セリト云フ  
 ブキヤナンノ言ニヨレハ英國内九十六大都市住民合計千六百五十萬ニ於テ一九一八年十月  
 十二日ヨリ十二月二十八日ニ至ル流成ニヨル死亡數四萬四千五百三十七人、十二月二十九日以

後三月八日ニ至ル間ノ死亡一萬三千六百五十人ナリト云フ

エマーソンノ言ニヨレハ一九一七年(大正六年)六月一日ヨリ一九一八年(大正七年)二月十二日  
 ニ至ル米國軍隊ノ流成死亡ハ一萬二千四百十人ニシテ内一萬一千九百三十二人ハ肺炎ノ合併  
 症ニヨリテ死セリ

ローノ言ニヨレハ伊太利海軍ノ現役兵士ノ三分ノ二感染セリ。パトラハ濠洲ノ流行ニ就  
 テ統計ヲ擧ケ、第一回流行ニテ九七%、第二回ニハ一一六%、第三回ニハ七五%ノ感染ニシテ、死亡  
 率ハ第一回〇三%、第二回二五%、第三回四五%ナリ、即チ死亡率ハ一九一八年(大正八年)一月ノ流  
 行ニテ最モ大ナルヲ示シタリ

ホワイト及グレイハ英領印度ニ於ケル「インフルエンザ」ノ慘害ヲ報告シ、一九一八年(大正七年)  
 ノ最後ノ三箇月間ニ「インフルエンザ」死亡者約五百萬ト計上セリ。印度ニ於ケル他ノ獨立州ノ  
 犠牲ハ不明ナルモ少クトモ百萬ヲ超過ス可シ、即チ全印度ニ於テ三箇月間ニ大約六百萬ノ死  
 亡アリタル譯ニテ此國ニ於ケル二十二年間ノ限「ペスト」死亡ノ半數ヲ超過セリ。第二回ノ流行  
 即チ一九一八年(大正七年)秋期ノ流行最モ猛惡ニシテ、肺合併症ヲ伴フコト甚タ多シ。「インフル  
 エンザ」ノ惡性ニハ氣象モ關係アルモノ、如ク、佛國戰線ニ於ケル印度兵士ハ僅ニ英國兵士ノ四  
 倍ノ死亡率ヲ示セルニ過キス。又印度ニ於テモ地域ニヨリテ病勢ヲ異ニシ、其ノ死亡率モ或ハ  
 七二・八%ヲ算シ、或ハ一%ヲ出テサル地アリ

ローハ支那ノ流行狀態ヲ説明シ、第二回流行ニ於テ肺合併症ヲ伴フコト多ク、又限局セル流行  
 中心アリテ村落ヨリ村落ヘ移轉シ、順次全地方ヲ風靡スルコト恰モ肺「ペスト」ニ異ラス。但シ細  
 菌學的検査ノ結果「ペスト」ニ非サルコトヲ確メタリ

各國代表者ノ一致セル意見トシテ人種、氣候、季節、戰時若クハ平時ノ差等ハ本病ノ流行ニ大ナル關係ナキモノト考ヘラル。但シ年齡ハ重要視セラレ、幼年ト老年トハ感染スルコト少ク、青年及壯者最モ多ク感染ス。重症型ハ重症ヲ感染誘發シ、肺炎敗血症ノ如キハ漸次四圍ニ傳播スルノ狀アリ

第一回流行ニ罹患セル者ハ幾莫カノ免疫ヲ獲得スルモノノ如キモ、其ノ免疫ハ完全ナラス。第二回流行ニ際シテ再ヒ罹レルモノ少カラス。ポイデンハ老年者ノ比較的罹病ヲ免ルルハ一八九一—一八九〇年(明治二十二年—二十三年)ノ流行ニ際シテ得タル免疫ノ殘存セルタメナラント云フ。但シ多數ノ代表者ハ免疫ヲ信セス、再感染ノ實例少カラサルヲ示ス者アリ

病毒ノ傳播ハ呼吸器ノ分泌物ニヨリテ人ヨリ人ニ感染シ、又ハ汚染セル手、器具等ニヨリテモ傳ハルモノト考フ。然レトモ實驗的證據アルニ非ス。例ヘハストロングノ如キ六十八名ノ特志家ニ就テ人體感染實驗ヲ行ヘルニ、患者ノ血液ヲ注射スルモ、分泌物ヲ喉頭、鼻腔ニ塗擦スルモ、又患者ニ接近セシメテ噴嚏ヲ被ラシムルモ確實ナル感染ヲ起サシムルコト能ハサリキ。日本ニモ同様ノ實驗アリ

人類以外ノ動物カ「インフルエンザ」病毒ニ感染スルヤハ不明ナルモ、マルタンハ犬、猫等カ病毒傳播ニ關係アルヘキヲ説キ、馬ノ「Gouine」ナル疾病ハ恰モ人ノ「インフルエンザ」ニ類似シ、又猿ニ「インフルエンザ」探ノ疾患流行スルヲ見タル地アリ

「インフルエンザ」ノ病原ハ未タ解決セラレズ。多數ハ「ブアイフェル」氏菌ノ存在ヲ認メ、肺炎ヲ合併セル時ハ肺炎双球菌及連鎖球菌ヲ認ム。但シ「ブアイフェル」氏菌ヲ以テ真正ノ病原體ナリトナスコトハ未タ立證セラレズ。他ニ濾過性病原體ヲ主張スルモノアリ。Strang、Nicolle et Leb-

ally, de la Riviereノ實驗ニ加ヘテ Gilson, Bowman, Connorノ成績ヲ上ケ、咯痰濾液ヲ猿ノ結膜下、鼻粘膜ニ接種シテ感染ノ陽性ナルヲ説キ、Rouxハ病原體ノ濾過性ナルコトノ可能ナルヲ信シ、其ノ實驗成績ノ果ラサルハ技術上ノ過失ニ因ルモノト考フ。Bradford Gilson等カ別々ニナセル實驗カ同一好成績ヲ擧ケ、肺炎組織、分泌液ノ濾液ヨリ野口氏培養法ニヨリテ一種ノ微生物ヲ得、動物ニ注射シテ多少ノ疑ハシキ症候ヲ起サシメタリ

又他ノ種類ノ病原體 Bac. Nchatetraginusヲ紹介セル者アリ  
豫防及治療ニ關シテハ報告少シ。「インフルエンザ」ノ症狀ハ心身ノ疲勞、寒濕中ノ曝露、榮養睡眠ノ不足等身體抵抗力ノ減退ニ關連スルコト大ナルヲ以テ成ル可ク之ヲサケ、居室ノ容積ヲ大ニシ、各人ノ臥床ヲ隔離シ、食器ヲ消毒シ、咳嗽噴嚏ヲ注意シ、異常アルモノハ直ニ入院加療セシメ、健康診斷ヲ必要トス

未タ特殊ノ療法ナシ。凡テ對症療法ノミ。鴉片及酒精ヲサケ、換氣ヲ充分ニス。患者及看護人共ニ「マスク」ヲカク可シ。病床ノ間ニ中隔ヲ置ク可シ

委員ハ何レモ豫防方策ニ就テ悲觀的態度ヲ掩ハス。英國ニテハ「ワクチン」ヲ推賞シ、病狀ヲ輕快シ、合併症ヲ減シタリト云フ。肺炎双球菌血清、連鎖球菌血清治療ニ有效ナリト云フ者アリ。「グーラム」ニ罹レル馬血清有效ナリト云フ者アリ。又濾過性病原體ヲ研究シテ有效ナル血清ヲ得ヘシト懸望スル者アリ

本會議ニ於ケル決議案左ノ如シ

(一)「インフルエンザ」ハ一九一八年(大正七年)三月ニ發生シ、非常ノ速度ヲ以テ歐洲、亞細亞、亞弗利加、澳洲ニ傳播セリ。第一回ノ流行ハ春夏ノ候ニ行ハレ、輕症ナリシカ、第二回ノ流行ニハ秋季ニ



來リ、死亡率及肺合併症大ナリ

英領印度ノ「インフルエンザ」ハ最モ激烈ニシテ九月以後三ヶ月間ニ二億三千八百萬ノ住民中五百萬ノ死亡即チ二〇七%ノ死亡率ヲ生セリ

(二) 病原ハ不明ナリ。ブアイフェル菌ハ患者ノ排泄液及氣管支肺炎ノ病竈ヨリ殆ト常ニ檢出セラレルモ、流行時以外ニモ本菌ヲ見ルコトアリ。本菌カ肺合併症ニ重要ノ關係アルハ明カナルモ之ヲ以テ真正ノ病原トナスヲ得ス

病原體ハ或ハ陶製濾過器ヲ通過スル不可視性ノモノナルヘシ。ニコル其他ノ實驗アレトモ未タ充分ナル實驗成績ヲ得ス

(三) 病原傳播ノ方法モ甚タ不明ナリ。發熱期ニハ唾液及氣管支粘膜カ病原體ヲ含有スルコトハ明ナリ。獨リ猿ノミナラス、猫、犬、馬等モ本病ニ感シ、又傳染ノ媒介ヲナストノ説アリ

(四) 一九一八年(大正七年)ノ第二回ノ流行ニ徴スルニ流感ノ免疫ハ甚タ弱キモノノ如シ。但シ經驗充分ナラス。印度人ノ如キ感受性強キ國民ニ就テ實驗セハ興味多カラシ

(五) 豫防接種、細菌學的療法、血清療法ノ如キ何レモ不充分ノ實驗アルノミ。特異的療法ノ行ハルハ眞ノ病原ヲ確定セル後ナラサル可ラス。目下ハブアイフェル菌肺炎菌、連鎖球菌等ヲ使用シテ「インフルエンザ」ニ隨伴セル細菌ニ對スル免疫ヲ生セシムルニ過キス

(六) 今回ノ「インフルエンザ」大流行ハ社會的、經濟的ノ大打撃ニシテ、各國政府ハ熱心ニ本病ヲ研究中ナリ

爾來「インフルエンザ」ノ研究ハ各國ニ於テ盛ニ行ハレタルモ、徹底的解決ヲ得サルコト流行當初ノ狀況ヲ去ルコト遠カラシ。巴里ニ於ケル公衆衛生國際事務局カ一九一九年七月組合各國

衛生局ニ對シ本病ノ病原、病理、疫學豫防的ノ諸問題ニ對シ研究業績ニツキ問ヒ合ハセアリタルモ之ニ對シテハ充分ナル回答ヲ蒐集シ得サリシモノノ如シ。以テ「インフルエンザ」ニ關スル智識ノ缺乏ハ各國共ニ略等シキヲ推察セシム

Mac Nallyノ執筆セル Influenza (一九二〇年出版)ヨリ今次流行ノ大體ヲ摘録スレハ、一九一六年(大正五年)十二月ライプチヒノ Strumpf 氏「クリニツク」ニ「インフルエンザ」ノ發生ヲ認メ、一九一七年冬ニハウキーンニ「グリツプ」ノ流行アリ。英佛各地ニモ肺炎ノ流行ヲ見タルカ如シ

一九一八年(大正七年)以來、バンデミーヲ生シタルカ、此ノ發源地ハ當時開戦中ナリシヲ以テ明ニ知ルヲ得ス。春夏ニ行ハレタル第一流行波ハ早ク東方ニ發セシモノノ如シ。同年三月支那ニ肺炎ノ流行アリ、鐵道沿線ニ擴カリ、肺「ベスト」ト誤ラレタリ。三四月頃日本ノ海軍ニ流行シタルカ支那ヨリ傳ハリシナラン。同年五月マドリッドニ流行起リ、七月頂點ニ達シ、漸次消滅ス。

次テ英國ニ傳ハル、之ヲ Spanish Influenza ト稱スルニ至レリ。同時期ニ米國軍隊ニモ肺炎ノ流行アリ。一九一八年六月ボンベイニモ流行ヲ生シ直ニカルカッタ、マドラスニモ現ハル。此流行ハ概シテ病勢良好ナリ。第二流行波ハ初秋ニ發ス。一九一八年(大正七年)八月サロニカ及附近ニ「インフルエンザ」アリ。此ハ春夏流行ノ終節トモ秋冬流行ノ發端トモ見ル可シ。九月ニハカナダ、ホンデユラス、葡萄牙、朝鮮ニ發ス。十月ニハベルギーニアリ。支那、南阿、ニュージールランドニ

モ存ス。北米合衆國ニテハ十月中旬極點ニ達ス。印度ニテハ九月ニ始リ、猛烈ヲ極ム。波斯其他附近ノ地方モ同様ナリ。十二月末ニ至リテ流行終熄セル如キモ、程ナク第三波ニ連ナルヲ以テ其ノ區劃必スシモ截然タラス。流行ノ第三波ハ一九一九年(大正八年)一月ニ始リ、二月三月ニ

渉ル。全地球到ル所ニ流行ス。第三波ノ死亡數ハ第二波ヨリ少シ。是レ第二波ニアリテ抵抗弱キ者消失シタルカタメナラン。倫敦ニテハ一九一八年(大正七年)夏ニ九八九人、同年秋ニ一、八九八八、一九一九年(大正八年)一月以後三、六三三人、インフルエンザニテ死セリ。英國ニ於ケル九十六大都市ノ總人口千六百五十萬ニ對シ、インフルエンザ死亡數ハ十月十二日—十二月二十八日(十一週)四四、五三七八(二六九名)十二月二十八日—一九一九年三月八日(十週)一三、六九〇人(八二名)ナリ

第二波ト第三波トハ臨床狀ノ症型相等シク、重症ノモノ多ク、災害激甚ナリ。有史以來最大ノ「インフルエンザ」パンデミックト稱セラレ

一九一八年(大正七年)十一月十三日倫敦ニ於ケル Royal Medical Society ノ「インフルエンザ」討論會ニ於テ Newslinger ノ説ク所ヲ舉クレハ左ノ如シ

倫敦ニ於テハ前回ノ流行後常ニ「インフルエンザ」死亡絶エス。各週死亡統計ニ就テ見ルニ年々多少ノ「インフルエンザ」死ヲ計上セリ

一八九一年(明治二十四年)ノ流行ニ際シテハ第十二週ニ起リ、八乃至十週持續ス

一八九二年(明治二十五年)ニハ第三週ニ始マリ六乃至八週間持續ス

一八九三年(明治二十六年)ニハ年初ノ數週間ハ「インフルエンザ」死亡數大ナリ。年末ニ至リテ輕キ流行アリ、七—九週間持續シテ翌春ニ及フ

一八九四年(明治二十七年)初頭少シク流行ス

一八九五年(明治二十八年)第十週ニ大流行アリ、六—八週間持續ス

一八九八年(明治三十一年)第五週ニ小流行アリ

一八九九年(明治三十二年)第十一週ニ小流行アリ。更ニ年末ニ大流行始マリ翌年ニツツク

一九〇〇年(明治三十三年)第二週ニ死亡率最大ナリ。約六週間流行ス

一九〇二年(明治三十五年)第八週ニ小流行始マリ六—八週續ク

一九〇六年—一九〇七年(明治三十九年—四十年)ノ冬期ニ小流行アリ

一九〇八年(明治四十一年)第九週ニ小流行始マリ、六—八週持續ス

一九一三年(大正二年)第十二週ヲ頂上トセル小流行アリ

一九一五年(大正四年)第八週ヲ頂上トセル小流行アリ

一九一六年(大正五年)春少シク「インフルエンザ」死亡ヲ増加シ、年末ニ及ヒ小流行アリ、一九一七年(大正六年)ノ一月ニ及フ

一九一八年(大正七年)五月以前ニ既ニ西班牙ニ「インフルエンザ」アリ。佛國ニ於ケル戰線ニモ

浸淫セルニモ拘ハラズ、倫敦ニ於ケル「インフルエンザ」死亡ノ増加ハ六月末ニ至リテ顯ハレタリ。從來ノ流行ハ冬春ノ候ニ發スルヲ常トセシカ、今回ノ流行カ夏期ニ始マリシハ例外ナリ。米國

ニ於テモ此春肺炎ノ流行アリテ溶血性連鎖球菌ヲ檢出セリ。一九一八年(大正七年)ノ春夏ノ候、英國ハ歐米兩大陸ヨリ特殊ノ強毒性ノ病毒ヲ輸入セシモノノ如シ。七八兩月ニ於テ六週間「イ

ンフルエンザ」死亡ノ激増ヲ來シタリシカ漸ク遞減シ、第四十一週十月ニ至リテ再ヒ急激ナル

死亡増加ヲ示シタリ。此年ノ兩流行ノ間隔ハ十六週ニシテ從來見サル短キ流行間隔ナリ

一九一八年(大正七年)第二回流行。 Medical Research Committee ハ八月十日ノ British Medical Journal

誌上ニ「インフルエンザ」ニ關スル細菌學的研究ノ結果ヲ募集セシカ學者及當局者ハ多クノ注意

ヲ拂ハス、第二回ノ流行ニ備フル所ナカリシニ、果然最モ兇暴ナル流行ヲ發シタリ

戰時ニ於ケル豫防ノ困難

若シ患者ノ隔離、工場ニ於ケル換氣ノ改善、群衆ノ絶對禁止等カ勵行セラレシナランニハ本病ノ災害ヲ減スルコト可能ナリシナランモ、戰事ニアリテハ只防疫ニ専ラナルヲ得サル事情アリ。交通機關内ノ雜沓防止モ同一理由ニテ閉却セラレタリ。

現代ノ醫學ハ普通感冒ニ向ツテ何等ノ豫防策ヲ有セス。普通感冒ハ國民ノ死亡表中ニ顯ハレサルモ、國民ノ活動能率ヲ減スルコト甚大ナルモノアリ。時ニ中耳、骨髓、腦膜等ノ化膿ヲ起スノミナラス、慢性氣管支炎ヲ發シ、從テ腦膜炎、肺炎菌、連鎖球菌、或ハ結核菌ノ感染ヲ誘發スルコト多シ。而モ此ノ普通感冒ニ對シテ一ノ豫防方策ヲモ有セス。豫防ノ困難ハ初發患者ヲ發見セスシテ既ニ病毒ノ飛散蔓延セル後ニ之ヲ警戒スルコトナリ。若シ凡テノ加答兒性疾患ヲ有スル患者カ充分ノ注意ヲナストキハ「インフルエンザ」死亡率ヲ減スルコトヲ得ヘキナリ。

世界的流行ノ原因

「インフルエンザ」ノ病毒ハ全世界同時ニ發生スルモノカ或ハ「インフルエンザ」病原體ハ常ニ存在スルモ、毒力強烈ナル特殊病毒カ輸入サレテ始メテ大流行トナルヤ又其ノ偉力ノ大ナル病毒ハ何處ヨリ來ルカ不明ナリ。又「インフルエンザ」病毒カ、或ル免疫性ヲ缺ケル國民ニ出會シテ動物體ヲ通過スル結果、毒力ヲ増大シテ「パンデミー」ノ原因トナルト想像セララルモ、未タ確證ヲ有セス。

麻疹ト「インフルエンザ」トハ其ノ關係類似ス。兩者ノ場合ニ於テ死亡率ヲ減センニハ、肺炎合併ヲ防クヲ必要トシ、此ノ方針ノ下ニ研究ヲ進ム可キモノトス。

世界的流行ノ原因ニ就テハ吾人ハ全然無智ナリ。又其病原體カ毒力ヲ増大スル理由モ全ク

不明ナリ

戰爭ノ影響

戰爭カ此ノ病原力増大ニ關係アリシコトハ想像セララル。住民ノ移動、軍隊ノ輸送ハ病毒感染ノ機會ヲ多カラシメ、人體通過ニヨリテ高マレル病毒カ輸入セラレタルモノナリ。「インフルエンザ」カ何處ニ發生シテ如何ニ世界ニ波及セシカハ、各國ノ統計ヲ精査セル後ナラテハ云ヒ難シ。豫防法モ未タ充分ナラサレトモ、(一)流行性加答兒ノ細菌學的研究ヲ進ムルコト、(二)各研究者ノ成績ヲ比較スルコト、(三)各國ニ於ケル疫學的研究ヲ綜合スルコトニヨリテ之ヲ改善スルニ至ルヘシ。感染ノ豫防ハ目下ノ醫學的知識ニテハ密居ヲ避クルコト、「マスク」ノ使用等ヲ可トシ、「ワクチン」ハ將來ノ研究ヲ要ス。口腔、鼻咽腔ノ洗滌ハ有效ナル可シ。

「インフルエンザ」ノ流行ニ際シテ、若シ加答兒性疾患ノ研究カ進歩スルコトアラハ、是レ「インフルエンザ」間接ノ功ト云フヲ得ヘシ。

討論ニ於テ Greenwood ハ今回流行ノ原因ヲ薪炭ノ缺乏ト人民ノ群居ニアリトナシ、Soltau ハ

四月イール陣地ニ感冒流行シ、三日ノ潜伏期、三日ノ發熱、三日ノ恢復期ニテ經過スル輕度ノモノナリシカ、五月末ニ至リテ一旦消失セルモノカ六月ニ至リ再ヒ盛ニ發生シ、七月中旬頂點ニ達シ、其後漸次減少セリ。後ノ感冒ハ病勢重ク肺炎ヲ起シテ死スルモノ少カラス。軍隊ニアリテハ其ノ三分二一時ニ發病シテ勤務シ得サルモノアリト説キ、Stock ハ南阿ニ於ケル流行カ歐洲ト同様八月ニ勃發シ、住民ノ大半ヲ犯シ、猿モ亦罹レルヲ報シタリ。

之レヲ要スルニ今回「インフルエンザ」カ地球上ノ何處ニ源ヲ發セシヤハ全ク不明ナリ。一九一八年(大正七年)秋季ノ大流行ニ於テ、瑞西、西班牙等カ稍々早く重症ノ「インフルエンザ」患者ヲ



發生セシハ事實ラシキモ、其ノ重症、インフルエンザ「病毒カ如何ニシテ發生シ、若クハ輸入セラレシヤハ不明ナリ。或ハ歐洲各國共ニ同時ニ悪性ノ「インフルエンザ」ヲ發セシモ、時正ニ交戦時ナリシヲ以テ、上記ノ中立國ノ報道カ比較的速ニ喧傳セラレシニ過キサル可キカ。歐米學者ノ唱フル如ク、一九一八年春季ノ「グリップ」ヲ以テ「インフルエンザ」ノ前驅流行トナサンカ、此ノ春季ノ輕症感冒ハ既ニ世界各地ニ存在セシヲ以テ見レハ、「インフルエンザ」病毒ハ既ニ久シキ以前隱微ノ間ニ世界ニ浸淫シ、時ト共ニ熱シテ悪性トナレルモノト見ル可ク、敢テ特殊ノ發源地或ハ傳播徑路ヲ要セサル可キナリ。然レトモ、一九一八年春季ノ感冒ト秋季ノ感冒トヲ同一物ナリトナスニハ猶幾多ノ論證ヲ要ス。又如何ニシテ病症悪性化セルカニ就キ研究ヲ要ス。想フニ病毒ハ既ニ散シテ世界ノ各地ニアリ。此者特殊ノ要約ニ遭遇シテ悪化ス、但シ必スシモ悉クノ病毒同時ニ且ツ同程度ニ變化スルニハ非サル可シ。從テ各地夫々ノ病性病毒發生地アリテ病毒蔓延ノ光景ヲ現出ス。必スシモ世界ニ唯一ノ病毒根源ヲ追跡スルニモ及ハサル可シ

今參考ノタメ米國 Public Health Reports ニ記載シタル各國初發地名及其期日ヲ表記スレハ左ノ如シ

地名又ハ國名 報告年月日 流行地及ヒ流行ノ概況

五月ニ於ケル流行  
 歐洲  
 西班牙 二十八日 フレンシア及ヒマドリフト市ニ於テ原因不明ナル熱性病ニシテ「インフルエンザ」類似ノ疾患ノ流行シツツアルヲ報ス

六月ニ於ケル流行  
 歐洲  
 西 班牙 二十八日 フレンシア及ヒマドリフト市ニ於テ原因不明ナル熱性病ニシテ「インフルエンザ」類似ノ疾患ノ流行シツツアルヲ報ス

七月ニ於ケル流行  
 東洋方面  
 印度 二十二日 ホンバインニ流行ス、メソポタミアヨリ寄港セル船舶ニ由來スト稱ス

歐洲  
 和 蘭 國 十三日 流行猖獗ヲ極ム  
 瑞 典 十三日 クリスチアニアニ流行ス  
 瑞 典 十三日 マルモ及ヒゴーランフルグニ發生ノ報アリ  
 瑞 典 十三日 七月末ニ至リベルン、センドゴールニ猖獗ヲ極メ全國ヲ席捲シツツアリ

南アメリカ  
 ブラジール 十六日 サントスニ流行ヲ報ス

八月ニ於ケル流行  
 歐洲  
 瑞 典 十八日 サロニカ及ヒカラマタニ流行シツツアルヲ報ス

東洋方面  
 印度 二十七日 四川省重慶府ニ流行シ市民ノ半數之カ爲メニ閉サル

歐洲  
 瑞 典 十八日 ストツツホルムニ發生ス

アメリカ

合衆國 二十八日

キヌトン及ヒ同市附近ニ於テ「インフルエンザ」ノ發生ヲ報シ患者既ニ千四百名ニ及フ

九月ニ於ケル流行

歐洲

丁排

全國ニ亘リテ九月中流行ヲ極ム

佛蘭西

ブレスト、ホルド、ムーブル、マールセイユ及ヒビナントン等ノ諸都市ニ流行ス

露威

トロンセムニ流行ス

伊太利

パレンツエ及ヒフロレンスニ流行猖獗ヲ極ムトノ報アリ

西班牙

西班牙全國ニ蔓延ス

葡萄牙

リスボンニ流行激甚ナリ

アフリカ大陸

チニス

チニス市ニ流行ヲ見ル

南アフリカ聯邦

ダムバンニ初發患者ノ發生アリ

ケープタウン

ケープタウン及ヒキンバインイニ流行ヲ報ス

シラレ、レオン

フリータワンニ流行ス

セネガール

ダカールニ流行ヲ報ス

モロッコ

タンジールヨリ流行ノ兆ヲ現ハス

北アメリカ大陸

カナダ

カナダノ大西洋沿岸ナル

グイクトリア

グイクトリアアグイル

キヌーベック

キヌーベック

ハミルトン

ハミルトン等ノ諸洲ニ流行ヲ來ス

コンネクチカウト

コンネクチカウト及ヒマサチニューセツツ兩洲ニ爆發シテ漸次大西洋岸及ヒメキシ

シコニ

シコニ沿フテ蔓延シ速カニ西方ノ諸洲ニ波及シテ遂ニ四十三洲及ヒコロンビ

地方ニ

地方ニ蔓延シツツアルヲ報シ太平洋岸ナルカリフォルニア、アリゾナ、アリゾナノ兩洲ニ

モ發生シ

モ發生シヘルサエド、サンガブリエル、ロスアンゼルス等ニ流行ヲ見ルニ至レリ

サンタクルズ

サンタクルズニ流行ス

サルバドル

サルバドル共和國內ニ流行ス

ホンジュラス

アマハラニ流行ス

ブラジル

パルメイラスニ流行ス

西印度諸島

首都ヘルムダニ流行ス

セントパウル

ルイセイナ及ヒモンテゴベリニ發生ス

東洋方面

鎮南浦、釜山、京城ニ流行ス

朝鮮

香港ニ發生ス

支那

香港ニ發生ス

十月

香港ニ發生ス

月中

香港ニ發生ス

流行

香港ニ發生ス

歐洲

香港ニ發生ス

十月

香港ニ發生ス

月中

香港ニ發生ス

流行

香港ニ發生ス

香港

香港ニ發生ス

二十

香港ニ發生ス

八日

香港ニ發生ス

香港

香港ニ發生ス

二十

香港ニ發生ス

八日

香港ニ發生ス

香港

香港ニ發生ス

二十

香港ニ發生ス

八日

香港ニ發生ス

佛蘭西

リヨン市ニ流行猖獗ヲ極ム

露西亞

セントエチーヌニ流行ス

伊太利

一日

ブレチヤンセル市ニ流行ス

希臘

六日

ニコメン及メツシナノ軍隊間ニ流行シツツアルヲ報ス

北アフリカ

二十五日

パトラスニ流行ス

北アフリカ

五日

リベリヤニ於テアフリカ大陸ノ各港ヲ出帆スル船舶ニ對シテ海港檢疫ヲ施行ス

北アフリカ

五日

五日ヨリ二十一日ニ至ル報告ニ據ルハアジエタ (Agylia) テン (Chihuahua) エドラス (Piedras) ネグラス (Negras) サビナ (Sabina) マタモロン (Matamoros) ニ發生ノ兆ヲ現ハシ急速ニ全國ニ傳播セリ

合衆國

流行性感冒ハ十月ニ入りテ隔離のナル村落及ヒ山間ノ地域ヲ除キテハ既ニ合衆國全般ニ傳播セリ。而シテ十月十五日頃ニハ大西洋沿岸ノ各都市ニ病勢猖獗ヲ極メ、又内地ノ各都市ニ波及シ十月下旬ニハ全洲ノ大都市ヲ席捲スルニ至リ。又合衆國ノ中央及ヒ太平洋沿岸ノ村落ニ於テハ十月下旬既ニ流行ノ高潮期ニ達セリ

中央アメリカ

七日

テグジガルン (Tegucigalpa) 及ヒメリゼ (Merize) 地方ニ流行ス

中央アメリカ

十一日

グイテイヤ市 (Guatemala) ニ流行ス

中央アメリカ

十二日

リモン (Limon) ニ猖獗ス

南アフリカ

二十日

十月初旬モンテビデオ (Montevideo) ニ爆發性流行ヲ來ス

南アフリカ

二十五日

ハラ (Par) 及ヒンヨフキ (Sao Paulo) ニ於テ流行激甚ヲ報ス

南アフリカ

二十六日

ラバハラ (La Guaira) マラカイキ (Maracaibo) 及ヒポネルトカバルロ (Puerto Cabello) ニ猖獗ス

南アフリカ

九日

キクタ (Jogota) ハランキヤ (Barraquillo) カクタヤナ (Cartagena) 及ヒポネルト (Poni) ニ流行ス

南アフリカ

十五日

カマンヤ (Camaguey) マエロタン (Nuevitas) ニ猖獗ス

南アフリカ

二十九日

既ニキエーパ同島ニ蔓延スルヲ報ス

南アフリカ

二十三日

キエーパ島ノ各港ニ海港檢疫ヲ開始ス

南アフリカ

二十二日

ポントントニオニ流行ス (Port Antonio) キングストン (Kingston) 二十三日ニ流行ス

南アフリカ

二十二日

全島ニ蔓延シ同島ノ各港ニ於テ海港檢疫ヲ施行ス

南アフリカ

二十七日

全島ニ流行スルヲ報ス

南アフリカ

二十九日

十月十八日頃ヨリ流行ノ兆ヲ現ハシ二十三日ニハ大カナリ島ラスパルマ (Las Palmas) テネリフ (Tenorifo) ニ流行ヲ見タリ

南アフリカ

十七日

キノメルニ散發性流行ヲ報ス

南アフリカ

十九日

各港ニ於テ海港檢疫ヲ施行ス

南アフリカ

十九日

オウクラランド (Auckland) ニ發生シテ全島ニ蔓延セリ

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

南アフリカ

十九日

マダカスカニ發生ス

東洋	支那	日本	十一月ニ於ケル流行	十月初旬湖南省北沙府ニ流行ス 十月初旬各地方ニ流行ス(後章参照)
歐洲	英國	土	ノッチンガム (Nottingham)ニ流行猖獗ヲ報ス	
東洋	アラビヤ	印度	アナンニ發生ス 印度全洲ニ渡リテ流行猖獗ヲ極ム 廣東ニ流行ノ兆ヲ現ハス	
合衆國	アリゾナ	アリゾナ	アリゾナニ發生ス アリゾナニ發生ス アリゾナニ發生ス	
十二月ノ流行	南洋諸島	トング	流行猖獗ナリ 流行猖獗ヲ極ム	
西印度諸島	プエルトリコ	プエルトリコ	プエルトリコニ流行ス	

### 第二項 各國ニ於ケル流行狀況

#### 一、瑞 西

一九一八年大正七年(初夏)既ニ注意スヘキ流行性感冒發生セシモノノ如ク七月中旬發行ノ公衆衛生局報 Bulletin du Service de Hygiène Publique ニ「グリッブ」ニ就テ記述シ、既ニ歐洲各地ニアリタル「グリッブ」ハ六月下旬途ニ瑞西國內ニ入り、其ノ症狀ハ比較的輕キモ、時ニ肺合併症ヲ來スモノアリ、大體ニ於テ一八八九—一八九四年(明治二十二年—二十七年)「インフルエンザ」ニ一致シ、其ノ病原菌ハ咯痰、液中ニアルヲ以テ、患者ニ接近セス、水滴傳染ヲ避ケ、密閉セル場所ノ群集内ニ入ルヲ避ケ、口腔ノ消毒ヲ勵行シテ豫防ニ努ム可シ。但シ病原體ハ一般ニ行キ涉レルヲ以テ豫防ノ效ヲ擧タルコト困難ナリト云ヘリ

八月六日巴里ノ「アカデミー・ヂ・メヂシン」ニ於テ Jules Renault ノ説ク所ニヨレハ近時瑞西ニハ流行性ノ「グリッブ」アリ、甚タ悪性ニシテ屢々肺炎ヲ合併シ重症ニ陥ルモノ少カラズ。肺炎ヲ惹起スルトキハ三四日ニシテ中毒症狀ト心臟衰弱ヲ發シテ死スルモノ多シ。小葉性肺炎ニシテ片側或ハ兩側ニ現ハル。合併症ナキモノハ氣管支分泌液中ニ「プアイフェル菌」アリ。肺炎ヲ起セハ肺炎双球菌ヲ見ル。全體ヨリ考フルニ、瑞西ノ「グリッブ」ハ先般來、佛蘭西、伊太利、西班牙ニ流行セルモノヨリ確ニ悪性ナリ。此ノ悪性感冒ヲ防クニハ個人ノ口腔衛生ト、患者ノ隔離ト、患者ノ安靜トニヨリテ肺炎ノ發生ヲ防クヲ要スト

氏附言シテ曰ク、瑞西ヨリ歸レル患者ヲ見タルニ全ク重症ニシテ本年五月以來佛國  
戦線ニ流行セルモノト其ノ性質ヲ異ニシ、全ク一八八九年(明治二十二年)ノ「インフルエンザ」ニ  
致スルモノナリ

之ニヨリテ見レハ四五月以來歐洲各地ニ輕症ノ「グリッブ」アリシハ明カナルモ、瑞西ニ於テハ  
既ニ七八月ニ於テ悪性ノ「グリッブ」或ハ眞ノ「インフルエンザ」ト同一ノ症状ヲ有スル感冒ノ流行  
カ始マリタルコトハ明カナリ

瑞西ニテハ十月ニ至リテ愈々「インフルエンザ」ノ流行猛烈ナルヲ以テ、十月六日遂ニ「インフル  
エンザ」ノ届出ヲ行フニ至レリ。一九一八年(大正七年)中患者六六四、四三五人(全住人ノ一六六%)  
死者二一、八四六(全住人ノ五四六%)、ニ上レリト云フ。一九一九年(大正八年)一月再ヒ流行盛  
ントナレルヲ以テ一月二十日ヲ以テ届出ヲ勵行ス可キヲ布告シタリ

二、西班牙

「スバニツシユ・インフルエンザ」ノ名稱ニヨリ特殊ノ責任ヲ有スルカ如キ西班牙ノ首府マドリ  
ッドヨリ内務省衛生局長 Dr. Manuel de Salazar ノ七月二十五日發送セル報告ニヨレハ、一九一八  
年(大正七年)五月下旬ヨリマドリッドニ於ケル死亡數例年ニ超過セリ。恰モ歴史上ノ「インフル  
エンザ」ニ類似セルモ但シ良性ナリ。初メマドリッドニノミ流行セシカ忽チ四方ニ傳播セリ。  
症候ハ「リユマチス」性及加答兒性アリ。若シ肺炎ヲ合併スルトキハ重症トナル。死亡數ハ五月  
二十七日ニ急ニ増過シ、五月三十一日ニ最高ニ達シテ例年ノ二倍トナリ、六月初旬ニハ忽チ減少  
セリ。二〇一四〇年ノ壯年者多ク倒ル。細菌學的検査ノ結果、二種ノ連鎖球菌ノ外種々ノ菌ヲ  
見ル、プアイフェル氏菌ハ最初發見サレサリシカ後ニハ大多數ニ之ヲ認ムルニ至リ、時ニ純粹培

養ノ狀ニアリ

即チ西班牙ニ於テモ、初夏ノ流行ニ於テ既ニ可ナリ重症ナル患者ヲモ混シタルモノノ如シ。  
而シテ一旦減退シタル流行カ秋冷ニ乘シテ再ヒ猛烈トナリ、十二月未迄ニ一四〇、四五一(全人  
口ノ七・二四%)、ニ及ヒ、十一月中ノミニテ四〇、四七八人ノ死亡者アリシト云フ

三、葡萄牙

隣接セル西班牙ト同一狀態ニシテ六月ニ於ケル春夏流行「Erippe verhoestivale」ト八月中旬ヨリ  
ノ夏秋流行「Erippe estivo-autonnale」トアリ。春夏ノ流行ハ輕症ニシテ夏秋ノ流行ハ悪性ナリ、之ヲ  
肺炎性「インフルエンザ」Influenza Pneumonique ト云フ。西班牙ニテハ五月ニ流行セシヲ以テ「スバ  
ニツシユ・インフルエンザ」ノ名稱行ハルルニ至レリ、但シ「スバニツシユ・インフルエンザ」ナル名ハ  
一五八〇年既ニ獨逸ニテ使用セラレタルモノニシテ、之ヲ踏襲セルモノナル可シ。八月ニ至リ  
テ悪性ノ感冒發生シ其症狀ニヨリテ肺「ベスト」ヲ疑ハシメタリ。臨床的ニハ單純性、中毒性肺炎  
性ヲ分ツヘシ。重症ナルモノノ七〇%ハ氣管支肺炎若ハ肺炎ヲ發ス。患者ノ五七%ニプアイ  
フェル菌ヲ檢出シ、其他肺炎双球菌、連鎖球菌等モ見ラル。感染徑路ハ接觸傳染ニシテ患者ノ届  
出モ豫期ノ效ヲ見ス。他ノ個人衛生、公衆衛生的手段モ著キ效果ヲ認メス

四、佛蘭西

一九一八年(大正七年)十月一日ノ「アカデミー・ヅメヂシン」集會上ニテ「Nette」ノ報告スル所ニ  
ヨレハ今回ノ西班牙「グリッブ」ナルモノト一八八九年—一八九〇年(明治二十二年—二十三年)ノ  
「インフルエンザ」トハ全然同一物ナリ。佛國ニハ一九一八年(大正七年)四月以來輕症ノ「グリッブ」  
流行アリ。獨逸國內ニモ同様ノ流行アリシカ如シ。或ハ一九一七年(大正六年)ニ於テ戦線ノ一



部ニハ類似疾患ノ發生ヲ見タリ。世ニ「スバニツシユインフルエンザ」ト云フモ、マドリッドノ流行ハ五月ニ發生セリ。西班牙ヲ以テ病毒發生地トナスヲ得ス

秋ニ至リテ始マレル第二ノ流行ハ重症者多ク、毛細氣管支炎、氣管支肺炎、肺炎ヲ併發ヲスルモノ多ク、時ニ赤痢様ノ下痢ヲ來スモノアリ。感染ノ危険大ナルヲ以テ種々豫防手段ヲ講スルニ至レリ。老年者ニ罹患少キハ或ハ一八九〇年(明治二十三年)流行ノ免疫殘存セルニヨルモノト想像セララル。プアイフェル氏菌ヲ發見スルコト屢々ナリ

五、伊太利

一九一九年(大正八年)三月「ボリクリニコ」誌ノ記載ニヨレハ、一九一八年(大正七年)春第一回ノ流行アリ、輕症ナリ。第二回ハ九月ニ初マル。九月中旬ヨリ一九一九年(大正八年)二月中旬マテ「インフルエンザ」死亡一六五、〇〇〇アリ。春季ノ流行ニ於テハ「ババタシ」熱「デング」等ト混同セラレシカ、秋季ノ流行ニ於テ病勢猛烈トナルヤ肺「ベスト」ヲ疑ヒタリ。免疫性アルモ確實ナラス。病原不明ニシテ的確ナル豫防策ナシ

六、和蘭

一九一八年(大正七年)七月十三日和蘭衛生學雜誌ニヨレハ、從來同國ニハ「スバニツシユグリツ」ナカリシカ英國軍隊ノ移動ニヨリ全國ニ散布サレタリ。中央衛生局ハタメニ布告ヲ發シテ醫師ニ「スバニツシユインフルエンザ」告知ヲ命セリ。當時伯林ニモ流行アルモ、甚タシク重症ニ非スト云フ。七月二十日及二十七日ノ同誌上ニ「グリツツ」流行ノ記事アリ。其ノ發生急激ニシテ傳播モ頗ル迅速ナルヲ説キ、輕症者ノ鼻咽腔ヨリ「プアイフェル」氏菌出テ、重症者ニテハ肺炎、双球菌、グラム陰性菌等發見セララル。今回ノ流行ヲ輕症ト云フモノアリ、重症ナリト稱スル者アルヲ察ス可シ

大勢ハ漸次重症ニ傾クモノノ如シ。例ヘハ七百四十五例ノ患者中五百六十三名輕ク百五十八名重ク、内二十四名ハ肺炎ヲ合併シ、五名死亡ス。即チ多少ノ重症患者ヲ交ヘツツアリシハ明カナリ。獨逸ヨリ歸還セル多數ノ患者ヲ觀察シタルニ多クハ重症ナリ。恐ラク獨逸國內ノ流行ハ惡性ナルヘシ。但シ歸還セル患者ハ特ニ重症ナリシモノトモ考ヘラル。此等ノ患者中ニハ極メテ重症ナル者アリ、體語ヲ發シ「コーマ」ニ陥レリ。以テ既ニ惡性「インフルエンザ」ノ徵アルヲ察ス可シ

秋期ニ至リテ流行激甚トナリ、一九一八年中ノ死亡三六、三一七人ヲ數フ(男一九、二五三人、女一七、〇六四人)次ニ和蘭ニ於ケル「インフルエンザ」死亡率ノ増加ノ著シカリシ月ヲ示ス

一箇年人口一〇、〇〇〇ニ對スル平均死亡數ト、一九一八年(大正七年)十一月及一九一九年(大正八年)四月ノ死亡數トヲ對比スルニ

疾 病	一九一三年—一九一七年平均	一九一八年十一月	一九一九年四月
	(大正二年—六年平均死亡)	(大正七年十一月死亡)	(大正八年四月死亡)
インフルエンザ	〇八一	一九〇四〇	三三六
急性氣管支炎	一九二	六六五	二六五
氣管支炎	六三九	四二九七	一四一八
肺 炎	六二九	六一四七	一三四一
助 膜 炎	〇三九	一一六	〇五六

即チ一九一八年(大正七年)十一月カ病勢最モ猖獗ナリシヲ知ル

七、英吉利

英國ニ於ケル流行モ略ホ他ノ諸國ト一致ス。英國軍隊ニテ特別調査委員ヲ設ケテ報告セル

所ヲ見ルニ、佛國戰線ニ於ケル英國軍隊ニハ一九一六—一九一七年大正五年—六年ノ冬ニモ「グ  
リッブ」流行アリ。但シ一九一八年大正七年春ニ至リテ流行著シクナレル理由ハ不明ナリ。  
一九一八年大正七年ニハ四月—五月ニ流行始マリ、七月マテ續ク、但シ輕症ニシテ熱、四肢痛、頭痛、  
咽喉ノ加答兒ヲ生スルノミ。急ニ發病シ、經過短ク、合併症少ク、肺炎ヲ來スコト極メテ稀ナリ。  
一九一八年大正七年八月六日 Young A. Griffith カ英國軍隊最近ノ「グリッブ」ニ就テ報告セル所ヲ  
見ルニ六月二十一日ヨリ七月十日迄ニ入院セル「グリッブ」患者千四百三十九名アリ。患者ノ隔  
離モ豫防ノ效少ナキカ如シ

秋季ニ及ンテ第二回ノ流行ヲ發生シ、多數ノ死亡アリシコトハ前掲ニユースホルムノ演說ニ  
モ明カナリ

英國ニ於ケル觀察ニヨレハ「インフルエンザ」死亡ハ老年ニ多キヲ常トセシカ、今次ノ流行ニ於  
テハ五十五年以下ノモノ多ク發病ス。戰爭ニ因スル生活狀態ノ變化及病原其ノ者ノ突然ノ變  
性等ニヨリテ流行狀態ニ變化ヲ來スモノナルヘシ

八、北米合衆國

一九一八年大正七年初春ノ候米國各地ニモ輕症ノ感冒流行ス。殊ニ或ル兵營ニアリテハ氣  
管支肺炎ノ流行アリテ特殊ノ溶血性連鎖球菌ヲ檢セシメタリ。一九一八年大正七年七月初旬  
ノ紐育「タイムズ」ニ歐洲ヨリ歸還セル船内ニテ多數ノ「スバニツシユ」インフルエンザ「發生セル記  
事アリ。八月ニ入りテ紐育新聞紙上ニ類似ノ報道屢々散見ス。八月下旬ボストンニ入レル運  
送船ノ乗客全部重症「インフルエンザ」ニ襲ハレ、之ヲ海軍病院ニ收容セルニ、病院勤務者ノ大多數  
ハ一二日ノ潜伏期ヲ以テ感染發病セリ。八月二十八日ヨリ九月十一日迄ニボストン地方ニ約

二千人ノ患者ヲ發シ、漸次東海岸及内地ニ蔓延シ、二週後ニハ西部海岸ニモ現ハレタリト云フ。  
要スルニ秋季ノ重症型「インフルエンザ」ハ歐洲ヨリ輸入セラレタルモノノ如シ。而シテ其ノ罹  
病率ハ一五—五三%ニ及ヒ、死亡モ、土地ニヨリテ大差アレトモ、住民ノ一九%—六八%ニ及フ。  
秋季流行ノ頂點ハ十月ニシテ軍隊ニ於ケル新患發生一日一萬一千七百五十人、一晝夜内ノ肺炎  
新患二千八百八十一人、死亡者七百八十一人ニ上ル

米國軍隊ニ於テハ一九一八年大正七年中戰死其他ノ死亡總數四萬七千三百八十四人ノ中「イ  
ンフルエンザ」死亡實ニ二萬三千七十七人ニ上ル

紐育市ニテハ五百八十萬ノ人口中「インフルエンザ」死者約二萬五千人、米國全土ニ於テハ人口  
約一億中「インフルエンザ」死者四十萬人ニ及フト推算セラレ

九、英領印度

一九一八年大正七年六月末ニボンベイ市ニハ既ニ惡性ノ感冒流行ヲ始メ、次テ四方ニ蔓延シ、  
死亡率ヲ漸次高メタリ。但シ病勢ハ秋季ニ及ンテ愈々猛烈ヲ加ヘ、十月ニ頂上ニ達シタリ。殊  
ニ印度ノ中央部、北部、西部ニ於テ著シ。印度ニ於ケル「インフルエンザ」ノ災害ハ世界第一ニ位ス  
可ク、英領印度ノミニテ五百萬ノ生靈ヲ失ヒタリ。即チ全人口ノ二%ニ相當ス。ボンベイ市ニ  
テハ九月乃至十一月ノ平均一日死亡三百二十六ニ到シ、此ノ率ニシテ一年間持續センカ一〇  
%以上ノ人口ヲ失フコトトナル可シ。中部地方ニテハ二箇月間ノ「インフルエンザ」死亡ハ二十  
二年間ノ「ベスト」死亡ノ二倍ニ達セリト云フ

一〇、南阿地方

ケープタウンニ於テハ十月初旬「インフルエンザ」流行ノタメ學校ヲ閉鎖セリ。九、十、十一月ノ



句ニ終熄セリ、一般ニ病勢ハ先年ノモノニ比シテ輕症ニシテ患者ニ對スル死亡率ハ約二%乃至五%位ニアリ

左ニ主ナル地方ノ流行狀況ヲ略記スレハ

○奉天ニテハ十一月中旬以來發生一月中旬ニ至リ流行衰退シ二月終熄セリ日本人患者四百人死亡二十人

○長春ニ於テモ十一月發生アリタルモ著シキ流行ヲ見ス

○吉林十一月ニ入りテ患者多少發生アリシモ皆輕症ナリシカ十二月下旬ニ至リテ比較的惡性ヲ帯ヒタルモノ流行セルカ一月ニ至リテ漸次減退セリ

○ハルビン方面ハ一月末ニ本病患者發生アリシモ流行ナシ

○北滿洲黑河地方ニモ十一月末同病ノ流行アリキ

○鐵嶺附近ニ於テハ十二月流行ヲ極メ患者數千名ニ達シ死亡者モ多カリシカ一月末終熄セリ

○安東ニテハ大正八年十月初旬ヨリ發生シ日々ノ病勢ハ先年ノモノノ如ク激烈ナラス十二月ノ猖獗時ニ於テモ新患者日々四五十名死亡三四名ニ過キス翌年二月初旬終熄ス

○天津十月以降一月迄邦人患者八百六名死亡九名ニシテ人口百ニ對シ患者一六ノ比ヲ示シタルモ大流行ナク終熄ス

○營口方面ハ十一月頃ヨリ流行ノ微アリシモ大事ニ至ラスシテ一月中旬ニハ下火トナリス

山東省地方ニ於ケル狀況

此ノ地方ニ於ケル流行ハ滿洲其ノ他支那地方ニ於ケル流行ヨリ稍猖獗ヲ極メタルモノノ如ク(大正八年)十月中旬濟南ニ患者發生アリタルニ初マリ漸次鐵道沿線ヲ犯シ十一月中旬青島ニ

入り病勢一時熾烈トナリ傳播力又強ク多數ノ患死者ヲ出シタリシカ十二月下旬ニ入りテ病勢衰へ一月ニ入りテハ散發性ニ少數ノ患者ヲ見ルニ至レリ流行期間ハ比較的短カカリキ

患死者ヲ見ルニ濟南ニ於ケル主ナル病院ニテ取り扱ヒタル患者數千二百人内外ニシテ自家療法ニヨルモノ幾十倍ナルヤヲ知ラスト

青島ニ於テハ患者五千二百二人死者百十九人死亡率二三ニ達セリ

豫防法トシテハ印刷物ノ配布其ノ他ノ方法ヲ以テ患者又ハ流行地トノ交通ヲ戒メ「マスク」ノ使用、咳嗽等ヲ獎勵シツツアリ

支那地方ニ於ケル狀況

二三ノ地方ヲ除キ流行一般ニ輕微ニシテ或ハ患者發生ナキ地方モアリキ

○北京ハ著シキ流行ヲ見ス

○九江地方在留邦人百三十人中流感ニ冒サレタルモノ二十人内外ニ達セルノミ

○直隸省赤峰地方ハ十一月十二月ニ於テハ二千五百人ノ患者アリシカ死亡者二十六人ニ過キ

ス一月以來終熄ス

○湖北省宜昌地方ニハ流行ナシ

○漢口ニ於テモ大正八年冬期流行アリ日本醫師ノ診療セルモノ日本人五百六十人餘死亡一人アリシカ翌九年一月下旬終熄ス

○南京地方ニハ大正八年末ヨリ流行アリ一月十七、八日頃最モ烈シカリシカ一月下旬稍下火トナリタリ

○其他杭州ニモ多少ノ流行アリ廈門、汕頭、廣東雲南、長沙地方ニハ著シキ流行ヲ見サリキ

○香港ニ於ケル患者概數ハ一月一日ヨリ二十三日迄ニ四萬五千人發生シ人口ノ約一割ニ當ル

○上海十一月以來漸次増加シ十二月最モ多數ノ發生患者アリ、サレトモ死者ハ日本人十二名支那人外國人約六十名ニシテ先年ヨリ激シカラス一月初旬稍衰退セルモ一月末再燃ノ傾キアリ一月以來ノ死者日本人十人、支那人約五十人、患者約六千人ニ達セリ、サレトモ「マスク」使用豫防注射等使用ニ至ラス

墨國及南米地方ニ於ケル狀況

○アルゼンチン、智利等ノ報告ニ因ルモ患者發生ナシ、墨國ニ於テハ大正九年一月末僅少ノ患者散發シ二月下旬ニ入り稍々多ク一日約四十名内外ノ死亡者ヲ出シ、三月初旬ニハ一日百名以上ノ患者發生シ、寺院、學校、芝居等閉鎖セルモ三月中旬ニ至リテ漸ヤク下火トナレリ  
南洋諸國ニ於ケル狀況

○ヒリッピン、濠洲地方ハ何レモ舊冬ヨリ多少ノ患者發生アリ、大正九年ニ入りテモ小ナル流行ヲ見タルモ大ナル災害ヲ來サザリキ

○マニラニ於テハ略痰ヲ道路街路ニ略出スル事ヲ禁シタリ

○ジャバニ於テハ一月末日迄ニハ流行ノ微アリト認ムルニ至ラザリシモ、東部地方土人、支那人間ニ罹病者出現セリ

西比利亞地方ニ於ケル狀況

大正九年一月二十八日發浦鹽駐在日本領事ノ報告ニヨレハ昨年十一月初旬ヨリ十二月初旬ニカケ患者多數發生シタルモ死亡率割合ニ低ク日本陸軍部隊ハ發生當時ヨリ一月末日迄ノ患

者千三百名死亡六十八人ニシテ海軍側目下患者ナシ

地方ハ昨年十一月末以來流行ナシ、市内ニ於テハ目下下火ト認メラル、大正八年末ノ患者モ内地ヨリノ渡航者ニ多カリシハ事實ナリ

○ニコラエウスク及ペトロバプロフスクヨリノ二月初旬ニ於ケル報告ニヨルモ該地方ニハ流行性感冒ノ流行ハ未タ一回モ認メザリシト云フ

## 第二節 豫防措置

### 第一項 各國ニ於ケル豫防措置

#### 一、佛蘭西

一九一八年(大正七年)八月十日陸軍衛生局ハ布告ヲ發シ、全國各地ニ「グリップ」ノ流行アリ、殊ニ軍隊ニ於テ肺合併症ノタメ重症者多キヲ示シ、氣管支肋膜炎患者ハ之ヲ細菌學的ニ検査シ其ノ成績ヲ速ニ報告スヘク、又患者發生ノ狀況ヲモ詳報スヘシト命シタリ。既ニ重症ノ「インフルエンザ」カ發生シ初メタルヲ知ルヘシ

一九一八年(大正七年)九月十日陸軍衛生局ハ更ニ布告ヲ出シテ「グリップ」及其ノ合併症ノ警戒益々必要ナルコトヲ示シ、患者ハ速ニ隔離シ、入院セシメ、且適當ナル消毒ヲ勵行セシメ、病院ニ於テハ患者ノ室ハ嚴重ニ他ノ患者ト隔離セシム。新患發生ノ場合ニハ其ノ部隊ヲ隔離シ、日々健康診斷ヲ行ヒ、一日二回口腔及鼻咽腔ノ消毒ヲ行ハシム。室及器具ノ類ヲモ消毒セシム。練兵ノ時間ヲ減シ、榮養ヲ善クシ、熱キ飲料ヲ給シ、秋冷ノ候ニハ保温ニ注意セシム。衣類ノ撰定、暖房



練兵ノ程度等ヲ當局ト熟議ノ上行ヲ要ス。病院ニ於テ個人隔離不可能ノ際ニハ特別病舎ヲ設ク可シ。鼻咽腔ノ消毒ハ病中ハ素ヨリ、恢復期ニアリテモ之ヲ行フ。軍隊ヘノ出入ヲ成ル可ク中止セシム。呼吸器疾患ノ傳染ハ密集生活ニ於テ猛烈ナルコトヲ了解セシム可シ。

陸軍省ハ同十月三日ニ治療及豫防ニ關シテ更ニ注意ヲ加ヘタリ。重症「グリツブ」ヲ分チテ(一)肺炎型(二)氣管支肺炎型(三)肺水腫(四)化膿性肋膜炎ノ四トナシ、神經型、急激中毒型ハ少ク、稀ニ腸型アリ。呼吸器ノ合併症ニ於テハ時ニ熱浴、瀉血五〇〇—七〇〇「砒」酸素吸入、「アドレナリン」、「テルベンチン」油ノ皮下注射ヲモ試ム可シ。

豫防法トシテハ、(一)床ヲ隔ツルコト(二)特別室ヲ設クルコト(三)重症、輕症、恢復者ヲ分ツコト、鼻口ノ消毒(四)同型ノ患者ノ集合スルコト、已ムナケレハ「街立」幕類ニテ隔ツルコト(五)重症者ノ隔離ノ消毒ハ特ニ注意スルコト(六)「アメリカ式」ニ從ヒ、看護人、醫師ハ「マスク」ヲカクルコト

陸軍衛生局ハ同九月十三日更ニ布告ヲ發シテ、「インフルエンザ」豫防ニハ絶對ノ隔離ヲ根本方策トナシ、但シ細菌學的證據ナキニ於テハ之ヲ實施スルコト困難ニシテ殊ニ本病ノ如ク、病毒汎ク、散漫シ、傳染急激ナルモノニアリテハ其ノ實效ヲ舉クルコト困難ナルヲ説明シ、次ノ三條ヲ注意セリ。(一)軍醫ハ輕症患者ヲ有スル部隊ヨリ診察ヲ始ムルコト(二)發熱者ヲ速ニ知ルコト(三)外來診察室ノ設備ヲヨクスルコト

同十月十八日布告ニ於テハ、外出者ヲ嚴重ニ検査スルコトヲ命セリ

Academie de Medicine ニテハ陸軍省ノ委託ニヨリ、Chanfard, Neter, Vincent Achard, Bezançon 等ヲ舉ケテ調査委員トナシ、十月十五日ノ例會ニ於テ豫防ニ關スル報告ヲナサシメタリ。其ノ要點ヲ舉クレハ「インフルエンザ」ハ非常ニ感染シ易キ特殊ノ急性傳染病ニシテ、潜伏期短ク、罹病後ニハ

一定ノ免疫ヲ生ス。肺合併症ハ二次的感染ニヨルモノナランカ、合併症モ亦傳染ス。感染ハ人ヨリ人ニ行ハル。密集、換氣ノ不良ハ之ヲ助ク。故ニ之ヲ豫防センニハ(一)患者トノ接觸ヲ避ケ、鼻口ヲ消毒シ、電車ノ消毒ヲ行フ(二)患者ヲ隔離ス。殊ニ單純患者ト合併症アルモノトヲ別々ニ收容ス。「マスク」ヲ勵行(三)病院ハ訪問ヲ禁ス(四)患者長途ノ運搬ヲ禁シ、車内ノ溫度ニ注意ス

強制届出ハ之ヲ勵行セス、醫師ノ篤志ニヨリ患者ノ發生ヲ報告セシム可シ  
内務大臣ハ九月十八日初メテ警視總監及各府縣知事ニ通牒ヲ發シ、本病ノ極メテ猛烈ナルヲ説キ、氣管支肺炎ヲ合併スルモノハ最モ危険ナルヲ論シ、「公衆衛生保護法」ニヨリ本病ヲ届出ヲ要スル疾病トシテ取扱フ可キコトヲ指示セリ。又本病豫防ニ就テハ地方衛生會議ヲ開設シテ諮問審議セシメ、患者發生ノ場合ハ消毒及隔離ヲ勵行シ、發生患者ノ報告ヲ希望セリ

右ノ通牒ニ基キ警視總監、各知事ハ管下ノ醫師ニ對シテ通知ヲ發シ、其ノ趣旨ノ徹底ニ努メタリ。警視總監ノ布告中ニハ(一)患者ノ住所、姓名、年齢(二)患者ノ狀況、隣人ニ及ホス危害等ヲ届出ツルハキコトヲ命セリ

但シ實際ニ於テ凡ノ患者ノ收容、隔離、消毒等ヲ徹底的ニ實行シ得ザリシハ他ノ諸國ト同様ナリ  
Defressine et Violle(Compt. r. Ac. S. 30 Sept. 1918)ハ「グリツブ」其物ハ原因不明ナレトモ、其ノ性質ハ輕症ナリ。肺炎ノ合併アリテ重症トナリ、死亡者増加セリ。肺炎ノ豫防トシテハ肺炎菌血清ヲ使用シ、或ハ「ワタチン」ヲ用ヒ、又ハ恢復者ノ血清ヲ使用シ、又「マスク」ヲ使用セリ

Wurtzel, Bezançon (Bull. Ac. Med. No. 39, Oct. 1918)目下「巴黎」ニ流行セル惡疫ハ「バスタ」コレラ「發疹」チノス等ニハ非スシテ「グリツブ」ナルヲ説キ、但シ重症ナルモノハ毛細氣管支炎、氣管支肺炎、肺充

血、肺水腫ヲ起シ「チヤノローゼ」窒息ヲ起スコトアリ。又同誌上ニ豫防法トシテ、十月十三日ニ於ケル巴里衛生會議ノ結果ニヨリ、(一)小滴感染ト汚染セル手指ノ危険ナルコト(二)患者ニ接近セヌコト(三)隔離若シ不可能ナレハ、衛立幕ノ類ヲ利用スルコト(四)患者身廻リノ物品器具ヲ消毒スルコト(五)家庭ノ隔離困難ナレハ入院セシムルコト(六)看護人ハ手、口ノ消毒ニ注意シ、患者重症ナル場合「マスク」ヲカクルコト(七)群集中ニ立寄ラヌコト(八)流行期ニハ口腔、手指ヲ特ニ清潔ニスルコト等ヲ記シタリ

Quarrelli (C. r. S. Biol. 8 Mars 1919) ハセルヲル「ニコル」其他ノ濾過性病原説ヲ信シ、患者咯痰ヲ濾過シテ一%ニ薄メ、之ニ「P」氏菌、肺炎菌、連鎖菌ヲ混シテ「ワクチン」トセハ可ナラント云ヘリ

一九一九年(大正八年)三月二十日ヨリ三十一日ニ至ル聯合國衛生會議ニ於テ「インフルエンザ」ノ病原ハ不明トナシ、其ノ傳染ノ方法モ明瞭ナラス、免疫ハアレトモ弱ク且ツ短ク「ワクチン」ハ猶不確實ナリトノ決議ヲ以テ察スルモ、佛國カ學術的ニ徹底セル豫防法ヲ持チ得サリシハ明ナリ

一九一八年(大正七年)九月十八日流行性感冒ニ關スル内務大臣ノ知事ニ對スル布告

流行性感冒ノ多數例國內ニ發生セリ。本病ハ通常良性ナルモ屢々氣管支肺炎ノ合併症ヲ起スカタメニ極メテ重症ヲ呈スルコトアリ

各縣ニ於テハ本病ノ發生ヲ遲滞ナク知ルコト必要ナリ、強制告知ノ手段ニ及ハス、只不取敢國民保健上告知ヲ要スル疾病トシテ醫師カヨク好意ヲ示サンコトヲ望ム可シ。茲ニ「ローン」知事カ管下ノ醫師ニ與ヘタル布告ヲ封入ス。予ハ諸君モ同感ナラント信ス。而シテ醫師モ亦國民ノ利益ヲ理解シテ諸君ノ依頼ニ應スルナラント考フ

貴下ノ縣ニ流成發生セハ直チニ許ス限リノ應急處置ヲ行ヒ、至急縣衛生會議ヲ召集ス可シ。此ノ會議ニハ地方ノ議員及衛生技師ノミナラス、目的ニ協ヘル凡テノ人物ヲ網羅シ本病豫防災害輕減ニ最モ有效ナル手段ヲ講ス可シ

此際一言セサル可ラサルハ消毒及隔離ノ特ニ必要ナル點ナリ

消毒設備ノ既ニ完成セル所ニテハ好都合ナルモ、他ノ之ヲ缺ク地方ニテハ速ニ之ヲ設置スヘシ

隔離ハ常ニ困難ヲ伴フ可キモ、醫師及當局ハ自宅若クハ病院ニ隔離スルコトニ全力ヲ盡ス可シ。戰時ニアリテハ病院ノ設備愈々困難ナリ。或ハ病院近隣ノ家屋ヲ利用シ或ハ「バラック」ヲ

作リテ急ニ應ス可シ  
一般住民ニ醫療ヲ施ス醫師ノ數ヲ考慮ス可シ。醫師數不足ノ際ハ衛生局地方部マテ申出テ必要ナル醫師ノ派遣ヲ乞フ可シ。地方部ニモ充分ナル醫師ナキトキハ予ノ許ニ申告セラレタ

本病ハ激烈ナル傳染病ナルヲ以テ、重症ノ流行アル場合ニハ民衆ノ集合、殊ニ市場、劇場、活動、音樂、集會等ヲ避ケシム可シ。但シ衛生會議ノ熟議ヲ俟テ行フモノトス

予ハ當地ニ於ケル正確ナル衛生上ノ事情ト對策トヲ即刻報告セラレンコトヲ望ム

ローン知事ノ醫師諸君ニ送ル書簡(要領)

縣衛生監督官ノ注意ニヨリ予ハ諸君カ扱ヘル患者數ヲ精確ニ報告シテ適當ナル豫防策ヲ講スルノ便宜トセラレンコトヲ希望ス。今後患者ノ發生ニ從フテ必ス之ヲ告知セラレタシ